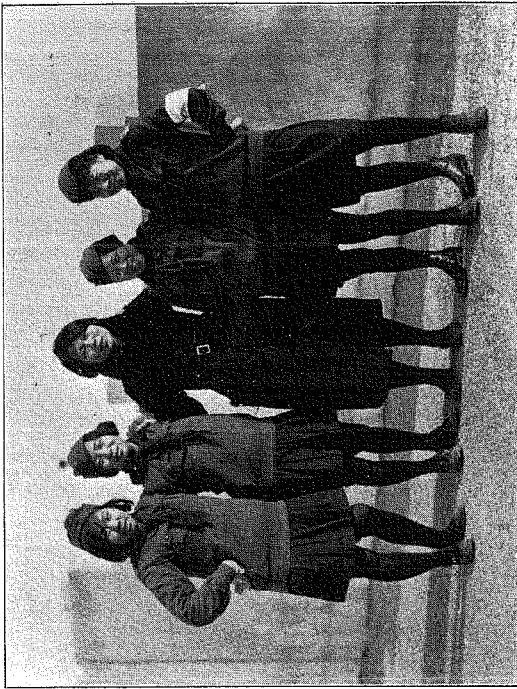


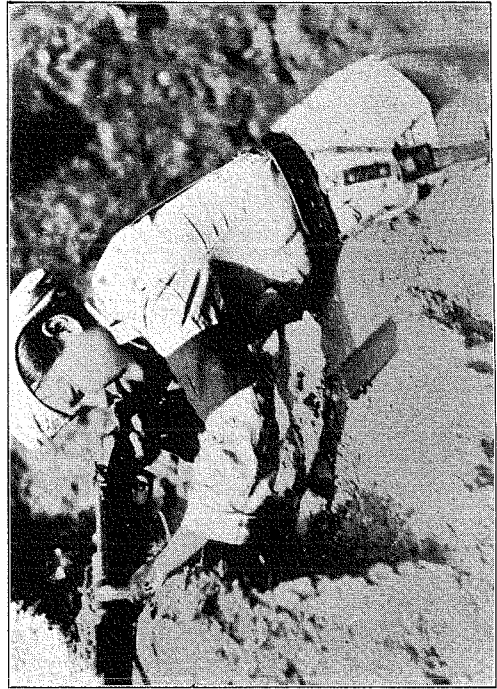
# 支那現代婦人生活

## 目次

一	家庭における妻妾	一
	亭主たちの不平―『鬻妻』―正夫人の權威―妻妾同居の理由―納妾の根據―は經濟關係から―アパート利用―無政府の塵れ―餘談三つ	
二	職業婦人	八
	彼女等の社會的位置 美しいのが條件―花瓶―女ばかりの銀行書店―モダリンな交際手 押の強い支那婦人―女教員―タイピスト―女寫字―見識高い女招待―ダンサー	
三	上海女學生の一断面	一六
	交際自由―共學と風紀問題―女學生の反問―中西女塾のマイ・クエーション―大學皇后―墮落―ユニホーム―女學生の雄辯	
四	摩登小姐	二四
	一品料理―里と坊に代る新邸―流行の本源地―『仇貨』愛用―化粧品―絹ドレス―高跟	



ドイツガールズの後銃



軍勇義子女の線前

鞋 悉く無職家

五 目まぐるしい流行……………三〇  
流行を生むもの―旗袍と斗篷―服装の商選―裾―袖―襟―下衣―靴―刺繍の應用

六 女流作家生活……………三六  
麗女士―悲哀體驗者―愛人との同様―P女士―結構破産者―清朝の二詩人―素蘭―柳如  
是―洋書家E女士―虞雲岫女士―幸福そのもの―泳心女士

七 映畫女優その他……………四二  
有爲轉變の女優舞女―銀幕の女王胡蝶―彼女の收入―離婚裁判で暴露―一流藝妓―その收  
入

八 女工・阿媽・娘嬢……………四六  
工場労働者―家庭の内職―阿媽の外國語―給料―娘嬢の收入―彼女等の郷土

九 揚子江の漁婦……………五三  
虹ロクリクの家船―『漁婦子』―轉造―彼等の守護神―夫妻共同の勞苦―粗末な服飾―い  
つも裸足―飲食

一〇 牛馬に等しい農婦……………六二  
潮州の賣婦―野獸の襲來―信仰―賣鹽婆―男子を凌ぐ體力―金華府の女傭―低廉な勞銀  
―賤民―妻を貸借する陋俗

附録 女學生義勇軍……………六五  
遭棄された婦人用品―斬漢中の診死體―救國義勇軍練起―戶府反國民黨化―參戰義勇軍の  
實數―中央大學の婦人救護隊―應病極る愛國學生―馮庸大學義勇軍―銃後の女學生―新聞  
記事

## 一 家庭における妻妾

亭主たちの不平―『鬻妻』―正夫人の權威―妻妾同居の理由―納妾の根據―  
は經濟關係から―アバウト利用―無政府の虞れ―餘談三つ

國民政府は、國民黨の黨綱として、法律上、原則として男女平等を認めてゐる。いふまでもなく、これは社會的位置の平等を意味する。である一方、支那の旦那様方は、頭腦の新舊を問はず、學つて家庭における男女平等の再吟味を要求してゐる。むかし、社會的に全然無權力であつた支那婦人が、家庭において婦人中心を主張したのは、自然の結果として了承できるが、すでに社會的に男子と平等の地歩に立つてゐる婦人が、家庭の内部においても、依然として專制君主的勢力を保留してゐるのは怪しからぬといふ不平だ。そのくせ、この不平家は、專制君主の面前に出ると、羊の如く従順であるから至極をかしいわけである。それはさておき、事實

支那人の家庭の主婦は、外國人が想像もできないほどの絶對勢力をもつてゐる。それは、むしろ一の異觀だ。

支那の上中流家庭は、外國留學生出身で、クリスト教風な教育をうけた人でもない限りは、大抵、一夫多妻である。『舊』字を冠する官僚、郷紳、富貴であればあるほど、夫人の數が多い。正夫人を筆頭に、第二夫人、第三夫人——少し多くなれば第十夫人にも及ぶ。女權論者はこの事實を指摘して、男子非難、女子向上を説いてゐるけれども、また容易に打倒崩壊されさうな習俗ではない。ところが、幾人の婦人たちがあつても、專制君主の權勢を専らにしてゐるものは、たゞ獨り第一夫人——すなはち正夫人のみである。これを北京語では『髮妻』—フアチーとよび、上海ではフイーチーとよんでゐる。何故に髮妻と稱するのか。現代支那の物識である王雲五氏の『王雲五辭典』をくつて見ると『原配の妻』とあり、それ以上に詳しい説明がない。男女ともに幼くして、まだ前髮を垂れてゐたところから約束された妻といふ意味であらう。わが國でいふ『共白髮』の例である。

北京語では、夫人を太太といふ。明朝では大官の妻を太太とよび、清朝では、官吏の妻を一

般に太太とよんだ。今では他人の妻を、おしなべて太太とよぶ。太太はすなはち夫人で、第一夫人、正夫人を正太太、第二夫人以下を姨太太とよび、そして姨太太に、二太太、三太太、四太太あることは、前にいつた通りである。

正太太すなはち第一夫人が、多くの姨太太、夫人等の間にあつて、獨り專制的權勢を縦まにするのはどういふ理由によるか。これは説明の要がない。家庭の主であり、本格的夫人であり、いくら多くの夫人があつても、夫人等を代表する資格をもつてゐるからだ。無論、若くて美しい第二、第三夫人の勢力が、正夫人を凌駕することもあり得る。けれども、それは常態ではない。そして必然的に家騒動を惹起する。その家が富んでゐ、名がある家であればあるほど、騒ぎも大きい。

かゝる著しい家庭争議の原因たる多妻制度において、數多くの夫人等が、共同の主人を中心として、多くは一家内に住んでゐるといふのは、一應、不可思議の感あるを免れぬが、彼女等の同居には、また自ら理由がある。一體、支那では儒教に従つて、祖先の祭祀を斷やさぬといふ事が、人の子たるもの、最高義務である。そしてその祭祀は、正統の後裔のみが行ひ得る權利で

もある。されば、家をなして子がないのは、親に對しても祖先に對しても最大の不孝とされる。正夫人に子なき場合は、彼女は最早や一家の主婦としての發言權を失つたものだ。そこで主人は正夫人に子なきを納妾の理由となし得、正夫人は主人が第二、第三夫人を娶ることを拒み得ざる理由となるのである。錢があつて色を好む男たちが、口をこれに藉つて、他の國でなら當然亂行とよばるべきことを敢へてし、多くの妻妾を同居せしめて慚ぢないのも、これを主因とする。次に同居を可能ならしめるのは、家屋の構造によるところもある。横一重をあけると、座敷も次の間も見通されるといふ日本家屋の構造ではない。支那人の家は、純粹な支那建でも、洋化した南方の建物でも、嚴重に戸締りができるやうになつてゐる。夫人たちは、客廳において一しよに談笑し、食事もそこで一しよに認めるが、その餘の時間は、夜は、それ／＼自室に立籠る。自室には、よほど親しい女客か、その専屬の召使の外は、めつたに他人の侵入を許さず、たゞ主人のみに時を問はずして出入する特權を與へてゐる。こゝらの様子は、小説『紅樓夢』、『金瓶梅』等について讀むべし。今も當時も、妻妾同居、主人對妻妾關係は一向に變つてゐない。第三の妻妾同居、多妻同居の原因は、一家の經濟から來てゐる。二つ三つ四つ、ある

ひはそれ以上に多くの家をもつことは、富人といへども經濟的に苦痛である。多くの妻妾が一家に居住し、それで家庭が治つて行きさへすれば、主人は經濟的に助かる。で、なるべく一家内に彼女等をおく。これは夫人等にとっては、あまりありがたいことでなく、不自由なことも免れ得ないが、正夫人——第一夫人にとつては、第二夫人以下の妾たちを監視する上に便宜がある。

正夫人の第二夫人以下に對する態度は、以前は、雜然たる主從關係であつた。小遣錢から節季々々の仕きせまで、全部夫人の手を通じて彼女等に與へられたものである——これは、無論、（？）表むきだけのこと、第二夫人以下が、秘術をつくして、主人から捲上げるであらうところの金財は、何人もこれを阻止するすべもないから——今もこの關係は全部壞はれてゐるのではない。正夫人には全く知られてゐない圍ひ者ならば問題外であるが、苟くも正夫人が認めてゐる第二夫人以下の夫人であるならば、別に家庭をもたしてあるものに對しても、彼女は正夫人たる威嚴を有する。不文の權利義務を行使する。

近年、上海あたりのアパートが發達しかけた都會では、一の大きな獨立家屋に多くの妻妾を

の他の家族が同居することの代りに、アパートの幾部屋を借入れ、たとへば四人の妾を有する男なら、甲のアパートの二つの部屋に二人、乙のアパートの二つの部屋に二人を別居させる方法をとるものがある。これは経済的にも、大きな一家を借るよりは安くあがるといふ。けれども、かゝる妻妾別居の際にも、妻妾は没交渉ではなく、毎日のやうに彼女たち相互に往來し、一週一度とか、一月一度とかは正夫人が住んでゐる本宅に集合して食事を共にするやうなこともある。つまり正夫人の監視は封建時代と同じで、たゞ靜的が動的に働くだけの相違だ。

支那人の家庭は、前にもいつたやうに、いはゆる女天下である。男たちは人前では『賤内』とか『荆妻』とかいつてゐるが、家庭内では『怕老婆』であり『畏内』である。日本人の眼から見れば、おかしくてたまらないほど家内を憚る。その憚られる最上のものが正夫人といふわけである。新しい女權論者たちは、第二夫人以下は、完全に人格さへ認められてゐない不幸な人々だとしてゐる。一面には權かにさうだ。けれども、彼女等をして正夫人と同等の位置にあらしめ、さらに亭主一般がひそかに切望してゐるやうに正夫人の權限を殺ぐことにしたら、まだ大家族制度が崩れきてゐない支那の上中流の家庭は、直ちに無政府状態に陥つてしまつた

らう。一方に多妻を希望し、一方に正妻の專制から免れようとする亭主どもは、あまり蟲がよすぎる。同時に、婦人の近代的自覺を促すの途、經濟的獨立の機會を與へずして、妾たちの非人格を責めたり歎いたりするのは間違つてゐる。

これは全く餘談だが、支那人と接觸する外國人は、彼等の家庭における主人對妻妾關係と、彼等の間の習慣とについて豫じめ知つておく必要がある。曾て袁世凱の智囊といはれた梁士詒氏が、若くて美しい二人の夫人を伴ふてわが國を訪ふた時、大阪の宿の世話をしてゐた人々は大阪ホテル——まだ中の島にあつた——の客が立てこんでもゐたし、三人でもあるから、梁氏のために二室、夫人のために一室でよいだらうと二室の用意しかしなかつたら、ホテルに入るに及んで、梁氏が夫人は必ず一室づゝたるべしと強調したので、世話人は大いに面喰つたことだつた。夫人から足を主人の室に運ばず、主人が足を運ぶ習慣であるさうな。また今は故人の大總統黎元洪氏が、別府を経て大阪に來た際、その伴ふてゐた夫人は、正夫人でなくて第二の夫人だつたが、大阪では公式の宴席が開かれず、單なる見物に過ぎないからとて、招待會なども私的のものに限られてゐたから、私どもは素知らぬ顔をして、夫人を正夫人として取扱つた

ものだ。それで黎氏の滞在期間を通じて『てれくさい』こともなくて無事に済んだ。しかし、同じ前清の大官周自齊氏は、正夫人でない夫人と一しよであつたので、その二年前日本にある間には無事であつたが、ワシントン會議に出席するためにアメリカに赴いた後、同地在留の同胞から一種の國辱をもつて論せられたことが一因となり、遂にその使命を無にしたものである。これは舊い型の支那紳士が、一夫一婦國の國民感情を無視した誤ちである。ゴルキーの先例もあるのに——日本人も心得ておいてほしい。

## 二 職業婦人

彼女等の社會的位置—美しいのが條件—『花瓶』—女ばかりの銀行書店—モダ  
 ーナな交換手—押の強い支那婦人—女教員—タイピスト—女賣子—識見高い女  
 招待—ダンサー

一個獨立の人格者として働く婦人の中には、筋肉方面におけると、精神方面におけると、大體二様の別がある。こゝには専ら精神方面の労働すなはち勤勞婦人について、斷片的に書いて

見る。

支那の總人口は、總計四億といはれてゐる。その一半の二億を女性だと假定し、さらに、その三分の二を幼女、老女と見れば、筋肉と精神との労働に堪へ得る婦人は六千七百萬位となる。その中から、家庭で働くもの、工場で働くものを差引けば、精神方面に働く職業婦人の數は、實際意外に少數で、全人口の一パーセントにすら達しないかも知れぬ。しかし少數とはいへ、この種の職業婦人は、將來の支那の婦人界の中堅をなすものとして、重く視なければならぬ。

第一革命の際、廣東、湖南あたりの新教育をうけた女性で、自ら革命婦人をもつて任じ、參政權獲得の運動を起す前提として、その中の少數者はバンカリスト夫人を學び、武裝して戦線に出たのがあり、議會の議場を授けたのもあつた。第三革命の後には、一時、廣東の地方議會の議員に選ばれ女代議士の初まりをなしたのがゐた。しかし、今日の支那には、進歩か退歩かは知らないが、かゝる女政客—參政權獲得運動者は全然影をひそめ息を殺してゐる。假りに有るにしても、我等は、彼女等を職業婦人として擧げない。こゝに職業婦人といふのは、言論、